

## 第八章 落選、当選、また落選

### 逆境を支えた精神

しかし森山は投票日の翌日から、再び国会を目指して地元と東京で活発な活動を開始する。この期間、栃木県内の日教組と真っ向からわたり合い、またけい肺病問題で立法化に奔走したり、森山は元気いっぱいだった。

森山の場合初当選までの二回と合わせてこれで三回目の落選。代議士として二期つとめたあとの落選は格別骨身にこたえたが、森山はその口惜しさをバネに不屈の精神に燃えた。一般に順風満帆できた人間は壁に突き当たると意外に簡単に挫折する。だが森山の場合、これまで何度も壁に直面し、その都度それを乗り越えてきた。「思い込んだら命がけ」の性格がこの逆境での戦いを支えた。外務省を飛び出して以来なめてきた数々の辛酸が、森山に、雑草のたくましさを身につけさせたといえるだろう。

森山の強みは多くの政治家のように、選挙に勝つこと、議員バッヂをつけること自体を目的にしていないという点だ。当選すること自体を目的にしている政治家は、選挙の結果そのものがすべてである。選挙に敗ければすべては終りという類いはショックから回復するのは容易ではない。

だが森山にとって代議士になることは単なる手段にすぎない。「日本はどうすれば再建できるか。日本を良くするにはなにをなすべきか」が真の目的なのである。壮士の如き発想だが、森山は政治家をめざしてから一貫してそう思い続けてきた。そのせいか、森山には逆境をくぐり抜けてきた人が持つ特有の蔭がない。並の苦労はしてきたのに、いつも日向で育ってきた坊っちゃん風の気風が漂う。

だからこそ、落選という事態に遭遇しても、森山本人の意氣はほとんど衰えない。森山の頭には「つぎに当選したらあれもやりたい、これもやりたい」という意欲が次々に浮んでくる。

森山はそのために落選のショックで茫然とするひまもなく、次の選挙に向かって走りはじめた。森山がノーベッドとなつたこの時期、政局はついに変わらず激しく動き続けていた。

二十八年十一月二十九日には鳩山（分党派）自由党が解体し、鳩山ら二十三人が自由党に復帰するが、三木武吉を中心とする残留派八人は日本自由党を結成する。二十九年に入るとまず二月一日に保全経済会問題が発生、ついで二十三日にはいわゆる造船疑惑が表面化する。自由党幹事長だった佐藤栄作に対する逮捕許諾請求に対し、大蔵省が逆指揮権を発動したことはあまりにも有名である。

一方、反吉田の保守勢力による新党結成への動きが起りはじめていた。まず九月十九日、鳩山一郎、重光葵らの会談で反吉田新党結成について意見が一致し、十一月一日には鳩山一郎を委員長とする新党結成準備会がスタートする。同月二十四日、鳩山一郎を総裁に自由党新党準備会派、改進党、日本自由党の合同によって「日本民主党」が結成された。

政治家の道を歩みはじめたとき、父の師でもあった関係から森山は鳩山の指導を仰ごうとした。それが鳩山の突然のページによって果たせず、そのことによって森山の政治家としての軌跡は大きく変化した。だがその鳩山がついに指揮官として森山の上にやってきた。

日本民主党は鳩山の個人的魅力も加えて、国民の大きな期待を集めた。これに対して自由党は同月二十八日、吉田總裁の勇退と後任に緒方竹虎の推せんを決定するなど、防戦につとめた。しかし、ひとたび傾いた政局の流れをかえることは難しく、十二月六日の民主、右派、左派社会党的内閣不信任案提出を受けて翌七日、吉田内閣は総辞職する。

十二月九日、新首相に指名された鳩山は翌年三月までに総選挙を行うと言明。森山の選舉運動も一挙に熱気を帯びたものとなつた。

明けて三十年一月二十四日、衆議院は解散された。選舉違反の後遺症も愈え、加えて全国的にわき起つた鳩山ブームにも乗つて、森山の選舉陣営の意氣は日に高まっていった。

二月二十七日の投票日。寒風の中でこの日、投票所へ足を運び、投票用紙に「森山欽司」と書いた有権者の数は五万二千五百二十八人。前回選挙の直後には「再起不能」とまでいわれた森山は、



鳩山薰夫人の応援を得て街頭演説会(昭和30年2月)。

なんと一位で当選を果たしたのである。それ以前にもそれ以後も、森山が選挙で一位当選したのはこの時だけだ。

森山にとって喜びもひとしおのこの選挙は非常に印象深い。

「一位当選した原因の一つは鳩山内閣だったからでしょうね。僕の父親は昔、鳩山法律事務所にいた。そうした縁もあって、選挙期間中に鳩山薰夫人がわざわざ栎木まで応援にきてくれたのです。

あのときは鳩山本人はもちろん夫人の人気もたいへんなものでしたよ。宇都宮のメイン・ストリートで演説してもらつたのですが、この道路が何百メートルにもわたつて完全に埋まつてしまふほどでしたからね。僕は『鳩山ブーム』に乗つたわけだ。それともう一つは、前回の選挙で僕が落選した。それに対する同情票もかなりあったようですね」

選挙の結果は民主党百八十五議席、自由党百十

二議席、左派社会党八十九議席、右派社会党六十七議席。これを受けて三月十九日、第二次鳩山内閣は民主党単独の少数党内閣として再スタートする。

森山も与党・民主党の一員として再び国会に出た。森山にとって与党的立場に身を置くのははじめての経験だが、政策の研究、立案、具体化などあらゆる面でいかに与党が有利かを痛感した。

選挙から約半年後の十月十三日、まず左右社会党が統一した。これに対応して保守合同の気運が一気に醸成され、自由党、民主党両党は党首問題をひとまずタナ上げにして四人の代行委員制（鳩山一郎、緒方竹虎、三木武吉、大野伴睦）をとることで合意。十一月十五日に歴史的な保守合同が成立し、「自由民主党」が発足する。

この間、森山はけい肺病特別立法問題を中心に活発な議員活動を展開し、自民党誕生後は若手の議員として地味だが、着実に地歩を固めていく。

#### 労働問題との本格的取り組み

森山は三十一年七月に自民党的労働局長に着き、同時に自民党内に設置された労働問題調査会の事務局長をも務めることになった。

このあたりからが森山と労働問題との本格的な関係の始まりである。

ことに労働問題調査会は森山の政治家としての足跡そのものといつてもいいほどだ。三十一年以来今日まで、大臣に就任した期間などやむを得ない事情がある時を除いて、常に森山はこの調査会一人だけである。

労働問題調査会イコール「倉石、森山調査会」だった。倉石が政界から引退した後は「森山調査会」そのもの。森山は亡くなるまで労働問題調査会の会長をつとめていた。

三十二年の十二月、森山は社会労働委員長に選任される。自民党内でも労働局長、労働問題調査会事務局長として、ライフワークとなる労働問題に本腰を入れて取り組みを開始する。地元における大問題であり、長年の懸案だったけい肺病問題も片がついた。

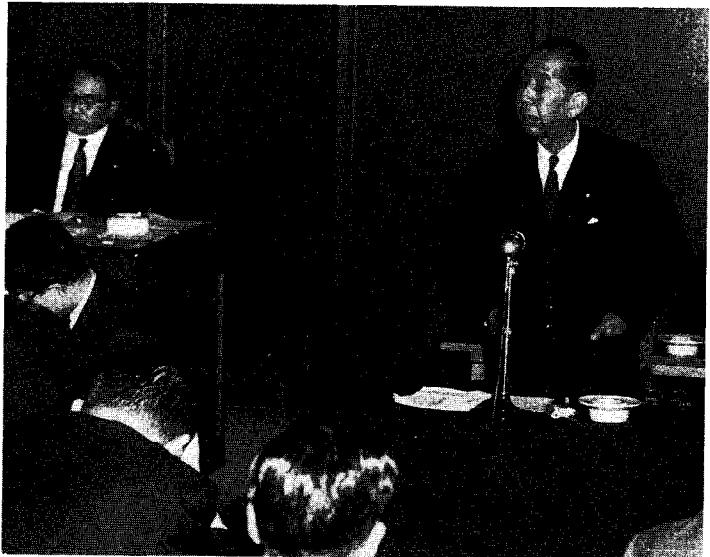
この時期、森山はまさに順風満帆の政治生活だった。政治家としてようやく思う存分働く場所を得た。選挙も前回は再起不能といわれたにもかかわらず、トップ当選を果たした。「もう選挙は大夫。あとは働くのみ」といった心境だった。

そうした矢先、またまた森山は思いもかけない苦汁を飲むことになる。

鳩山内閣は再軍備、改憲構想を打ち出し、小選挙区制法案を国会に提出、国会は乱闘につぐ乱闘の中で推移した。しかし鳩山内閣はこの二つの問題でつまずき、日ソ国交正常化（三十一年十月十

九日）を花道に、十二月二十日総辞職した。

あとを継いだのは石橋湛山だったが、この石橋内閣も石橋首相が病氣のため辞任することになる。同内閣は三十二年二月二十三日までのわずか二ヶ月間のはかない内閣だった。



衆議院社会労働委員長として。(昭和33年)。

代わって登場したのが岸信介内閣である。この年の十月には、日本が国連総会で安保理事会の非常任理事国に当選、わが国もようやく国際社会の一員として正式に認知される時代に入っていた。

この岸内閣は翌三十三年四月、社会党委員長の鈴木茂三郎と岸首相との間で解散の日程について相談した結果、不信任案を上程し討論後採決せずに解散するという方式で合意した。この結果、衆議院

は四月二十五日解散された。いわゆる「話し合い解散」である。  
五月二十二日に行われた第二十八回総選挙の結果は自民党二百八十七議席、社会党百六十六議席。だが、自民党的當選者名簿の中に「森山欽司」の名前はなかった。  
前回トップ當選した森山は得票数を約一万五千票も減らし、三万七千二百八十八票しか獲得できず、七位で落選してしまった。森山にとって四回目の落選だ。

森山の落選の弁がおもしろい。

「當時、国鉄の労働組合や、勤評闘争、学力テスト反対闘争などで激しい運動を展開していた日教組を僕は厳しく叩いた。“こういう勝手なことを日教組にやられておいていいのか”とか“国鉄の組合は違法なストライキを打つて、國民に迷惑をかけている。こんなことを許していたら、日本の将来はどうなるかわからない”といった主旨の話を徹底的にやりました。当时、立ち会い演説会の持ち時間は一人二十五分でしたが、こういう話をはじめから終りまでブチまくつた。最後に“どうぞよろしくお願ひします”とつけ加えるのも忘れるくらいでしたね。これはそれなりにいい影響もあつたと思いますが、おかげで国労と日教組からは“指名手配”を受けました。とにかく敵が増えましたよ。僕の支持者の中には学校の先生や、家族の中に先生をやっている人もいたのですが、そういう人から“森山さんは教育に理解がない”といわれるし、日教組にも徹底したウイスパー戦術（ささやき戦術）をやられた。この問題でおそらく六千票は減つたでしょう。支持者の人たちからも“森山さん、敵をつくるようなことをやられたら困る”といわれまして、それ以来今日まで、選挙の落選、當選また落選

ときには労働問題の「ろ」の字もいわないようにしています。中央では以前にも増して熱心にやっていますがね。選挙ではなかなかわかつてもらえません」

信念の前には損も得もない。わき田もふらず目標に向かって邁進する、まさに森山の真骨頂が發揮されたが故の敗北だったわけだ。

もつとも森山の落選の原因はこれだけではない。

「ひとつは、当時まだ若いのに社会労働委員長になつたものだから、ある意味では出世ですよ。それで一般的の有権者の間や支持者の中にも、『森山はもう大丈夫』という安心感があった。しかも前回はトップだつただけに油断もあつた。私の支持者たちは海千山千の選挙プロではなく、善良なまじめな人ばかりなので、ちょっとといいと安心してしまうのです。

この選挙で僕にとつてもう一つマイナスだったのは、東京で一度だけ当選したことがある高木章という人物が僕の選挙区の柄木一区から出馬したことです。鳩山内閣のとき小選挙区制が導入されそうになつた。そこでこの人が上都賀地区から立候補したいといつてきました。同じ選挙区だった船田中さん（元衆議院議長）は自分の地盤が宇都宮中心だったから、小選挙区になれば上都賀地区は別の選挙区になると考へた。そこで大野伴睦さんの頼みを入れて、高木という人物を公認したのです。ところが小選挙区制はつぶれちゃつた。それでも高木氏は出馬するということになつた。この高木という人はすごい金権候補でね。たとえば僕の陣営がお祭りのとき、事務所のそばの会所に清酒を二本届ける。すると彼の方は市内の全会所に十本ぐらいずつ届ける。一事が万事で、下の部分に自

分の名前を入れた地名、地番の表示板をバラ撒いたりね。後年、このとき高木陣営にいた人に聞いたら、この選挙で高木氏は二千万円から三千万円は使つたそうです。いまいえば二億円か三億円にはなる。結局、高木氏も落ちて二度と出馬できませんでしたが、僕もだいぶ影響を受けました。僕は金なんかで選挙に通るもんかと思つていきましたが、桁がちがうとやはり効くんですね」

### 森山会館建設の趣意

この会館は地元出身の森山飲司先生の政治活動、同志扶助の場として作られたため、政治家らの本後援会員をはじめ、この趣旨に賛同の有志各位の澤財を賄出して建設されたものである。この建設は先生が信念に生ず、國家の發展と郷土の繁栄のため、ますます活躍されたい政治家として大成せられるこ

として念願してやるといふ意図で、またこの会館のさくやかな施設が同志により普く利用され親しくされて、これが望外の事とするものである。

昭和三四年七月

上都賀地主森山後援會  
森山会館建設委員一同

落選中の政治家は党本部などには出入りしないもの

だが、森山はこの落選期間中も自民党の労働問題調査会の事務局長のポストに座つていた。国鉄問題や日教組対策で走りまわる一方、三十三年の九月には

ドイツ、アメリカへ労働事情の調査のために渡るなど、森山はこの落選期間を利用して、自らの充電に励んだ。

れる場所がなくてはだめ」という意見が強まった。

前出の渡辺七造がこの頃のこと振りかえってこ

ういう。

「森山先生の弟の雅司さん、石塚正衛さん、それと

私の三人が中心になってたびたび話し合い、建築す

ることになりました。場所は町の中心部、市役所に

も近い所がいいとのことで現在地になったのです。

ところが土地の借用交渉で予想しないことが起きま

した。地主の宇賀神さんに主旨を説明し、借用を申

し入れたところ、森山先生には貸せない。渡辺七造

さんとの契約なら貸しても結構です」というのです。

相談の結果、結局、私の名儀で借りることにしまし

た。建築資金のうち五十万円は森山先生が負担し、

不足分は鹿沼地区の同志が寄付をして昭和三十四年

に完成したのです。その後、先生も連続当選できる

ようになりました。このこと一つとっても当時の苦労がし



森山会館竣工直後の総選挙で当選(昭和35年11月)。

のばれますよ」

「森山会館」完成後、昭和二十五年から森山は連続当選を重ねることになる。支持者たちのねらいは見事、適中したわけだ。

三十五年、安保闘争は日本全国を革命前夜のように騒然とさせた。その中で日米安保条約改定をなし遂げた岸内閣は退陣した。あとを継いだ池田内閣のもとで衆議院は十月十七日に解散、十一月二十日に行われた総選挙で森山は再度返り咲いた。

得票数は五万四百六票、第二位当選である。これ以降、森山の選挙はすっかり安定し、一年の衆・参同日選挙での最下位(五位)当選を除けば常に二～四位で連続当選を重ねている。初の立候補から十年以上もの間、選挙地盤が安定せず、落選と当選を繰り返してきたことになる。十年以上も地盤が安定しない政治家は、通常消えていくのが政界の習いだが、この苦しい時期を乗り越え、ついに安定した地盤を確保したという森山のようなケースは、きわめてめずらしい。

「十年以上も選挙が安定しなかったのは、一言でいうとカネを使うことが恥だと思つていたからじゃないですか」

森山本人はこう分析した。政治家は下手に教養があるとカネを集めるのも、使うのも下手だといわれるが、まさに森山はその部類の人間である。森山はその辺の事情は百も承知だったが、いかに不利でも金による政治はできない性分だった。